北海道教区仏教壮年会連盟　能登・金沢視察研修報告

北海道教区仏教壮年会連盟

令和６年能登半島地震及び９月に発生した豪雨災害により犠牲となられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申しあげます。

北海道教区仏教壮年会連盟では、１２月２日から５日までの３泊４日で石川県と京都への研修旅行を後志組２名、胆振組１名、空知南組１名、北見東組１名、札幌別院５名、教務所長、事務局１名の計１２名で実施いたしました。

石本理事長の発案で実施いたしましたこの研修旅行は、当初は教区仏教壮年会の朋友の輪を拡げる機会として御旧跡巡りなどを企画しておりましたが、本年１月に能登半島沖を震源地とする地震が発生したことにより、目的地を石川県(能登)に変更し、現地の状況を見て聞いて広める事を目的とした研修として実施いたしました。

今回の記事では特に石川県(能登)での研修の様子をお伝えいたします。

研修旅行初日の１２月２日(月)は本願寺金沢別院に参拝し、中村祐順輪番と浄土真宗本願寺派 能登半島地震支援センターの篠原法樹職員より１月の発災から現在までの状況をご説明いただきました。中村輪番のお話の中で、「発災から１年が経過しようとしているが未だに断水や停電が続いている地域がある。また被害の大きかった能登半島は過疎化が進んでいる中で今回の地震が発生し、門徒の離散が続いている。それによってお仏壇が毎日のように運び困れている」とご説明いただきました。

２日目は本願寺派能登半島地震支援センターの篠原職員に案内していただきながら能登町にある本派寺院の法栄寺、松岡寺に参拝し、ご住職や坊守様からお話を聞かせていただきました。

まず法栄寺では、坊守様が震災直前から現在まで撮影された写真についてご説明いただきました。

地震発生日（2024 年 1 月 1 日）前日の大晦日に除夜の鐘をついた鐘撞堂や、元旦にお参りした本堂が、午後には損壊し、大きく傾いていました。私たちが法栄寺に参拝した時には本堂の公費解体が終わっており、本堂があった場所は更地となっておりました。

また、坊守様のお話の中で強く印象に残っているのが、金婚式についてのお話です。

地震の前年、テレビでとあるご夫婦が子どもたちの企画で数十年前に結婚式を挙げた式場で金婚式を挙げるストーリーのドラマを見ながら、無意識に自分の金婚式の式場はお寺の本堂だなと思っていたことをお話しされ、涙ながらに、来年がご自身の金婚式だったのに、震災によって本堂が倒壊し、解体を余儀なくされ、こんなことになるとは夢にも思わなかった、とお話しくださいました。

解体された本堂には門信徒の方々との思い出も多くあり、できれば本堂を解体せずに残したかったと、言葉をつまらせておられました。そして、ご住職にもまだ話して═おられないこととして、何年かかっても、小さい本堂でもいいから再建し、金婚式を本堂で挙げる決意を話してくださいました。

当たり前のように身近にあったものが突然無くなってしまったショックは計り知れませんが、前を向き歩もうとする坊守様のお話に心打たれました。

また一方で驚いたことは避難所の問題点です。行政指定の避難所に住民が集まったところ被災で使えなくなり、住民の取り決めの２次避難所に駆け込みましたが、行政指定の避難所ではないため物資の提供がなかったということです。そこに本願寺派能登地震支援センターの速やかな対応で物資が提供され、地域住民が少しの間でも安心して過ごせたとお話を聞かせていただきました。

次に参拝させていただいたのは、蓮如上人の三男を開基住職とする松岡寺でした。能登最大規模の本堂は圧巻でした。松岡寺は本堂の被害は大きくなかったそうですが、“御殿”といわれるご門主様をお迎えするための建物が大きな被害を受けました。震災により壁は崩れ、建物の一部は崩落しており、公費解体が決まったとのことで、再建は難しいだろうとおっしゃっていました。

また、ご門徒の方々の被害が大きいとのお話しをいただきました。多くのご門徒が、震災をきっかけに金沢や他の地域へ避難され、戻られない方が多くいらっしゃるとのことでした。本堂の余間にはご門徒のお仏壇から避難されたご本尊や骨壺、倒壊してしま

ったお墓から掘り起こしたお骨を入れた大きな容器がたくさん並んでおりました。ご住職のお話の中で、能登を離れるご門徒からは、「生まれ育った能登を離れるのはつらいが、能登を離れても私たちは松岡寺の門徒としてお寺を守っていきたい」とお話しいただいたことを聞かせていただきました。

参拝させていただいた寺院を巡る道中には、公費解体により更地になった場所や公費解体中の家屋がありましたが、まだまだ倒壊し手つかずのような建物が多くあり震災発生から 1 年が経とうとしているとは思えない現状でした。道路も地割れや隆起、また金沢から能登を結ぶ、「能登里山街道」と片側 2 車線の道は片方が崩落し片側通行となっている区間が多くありました。また 9 月の豪雨災害の影響か、山の斜面も所々崩れ落ち、屋根にブルーシートを張った家屋が多く見られました。

ニュースでは報道が少なくなり現状が分かりにくい状況となっておりましたが、今回の研修で現地に行くことでまだまだ復興に時間を要することが分かりました。参加された仏壮会員の方は、「ニュースで見ていたのと、実際に見るのでは全く違った」とおっしゃっていました。支援センターの篠原職員も「物資は足りているが、能登は高齢化によって人手が足りない。解体業者や建築業者が少なく能登の業者だけでは手が回らず、何ヶ月も待たされる状況にある。支援センターにおいても、お仏壇の移動や公費解体に向けた片付けなどの仕事があります。今後も引き続き協力をお願いすると共にボランティアに来てほしい」とおっしゃっていました。

北海道教区仏教壮年会連盟としてもこの研修を広く周知し能登の現状を伝えるとともに、我が事ととらえ、輪を拡げ、若い人たちを中心に仏青、仏婦、仏壮それぞれの得意分野でボランティアチームを派遣し引き続きの支援を行っていきたいと考えています。そしてこの先もいろいろな形で継続的に被災地と関わり続けていきたいと思います。